



オヤジが、うちに強い、いい選手がいる。ってあちこちのジムに手紙を出して宣伝してくれてたんです」

高校卒業後、大学にボクシング進学する選手もいる。彼も、ボクシングの強い10に余るほどの大学から誘われもした。ただ、その場合、大学の部活にありがちな先輩後輩の序列や、ことあるごとの飲み会などお酒で潰された選手も多いというわさもあり、純粹にボクシングに没頭できる環境が欲しかったため、進学は考えなかった。

米倉ジムは北海道だけでなく沖縄国体にもスカウトに来た。そして彼の気持ちは固まった。

米倉ジムに所属を決め、そのお披露

目は、全日空ホテルの広間で金屏風の前行われた。「米倉会長に、世界チャンピオンにもなれると言われてすごく嬉しかったですね。よし、頑張ろう、絶対になってやると思っていました」

上京し、上野毛の寮で一人暮らしを始める。それまで母親が全部やってくれていたことを一人でこなさなければならなかった。料理ができないため、

食事は全てコンビニ弁当で手軽に済ませた。都会のテンポはどんな場面に於いても徳島よりかなり早い。それに

いていけず、栄養の偏りもあって、精神と肉体の両方に不調を来し始めた。「もう川島はダメなんじゃないか」とヒソヒソ言われるくらい、調子が落ちた。

米倉ジムは4部制で、それぞれ練習している人数よりもサンドバッグの数がない。当然、サンドバッグの取り合いいになる。成績が良ければ誰が使っているかが「どいて」と割り込んで使う。成績が不振だと後輩にさえも「どいて」と言われてサンドバッグを奪われる。

「アマチュアのエリートが落ちると大変なんです。メンタル的にもやられてしまし、それが体にも出てくる。それまで50・8kgのフライ級にいたんですけ

ど、気がつくとも60kgになってました」

もがきながらの日々だったが、ボクシング以外にすることはなかった。遊びに出かけるでもなく、コンビニでバイトをする他は目白にあるジムと上野毛の寮の往復だけだった。追い詰められながらも腐ることなく、トレーニングを続けた。

「世界チャンピオンになったとき、このボクシングを周りに伝えたいと心底思ってたんです。で、27歳の2月の試合を最後に現役を引退。30歳でジムを開きました」

2年余りのブランクは、ジムを開くための準備に充てていたのかと思いきや、「ちょっとだけタレントしてました(笑)。ドラマや映画に出たりバラエティ番組にも出たりして。もちろん、ボクシングの解説もやりましたけど」

先輩の紹介で知り合った奥様との間に大学生になる男の子がいる。ボクシングに興味はないそうだが、最近、トレーニングに関心があるようで、ジムの営業が終わってから体を動かすにきているという。「一緒に走ったり筋トレ